

## 小豆島における宗教ツーリズムの変容と 巡礼者の経験の特徴

川添 航・劉 逸飛・坂本優紀・鈴木修斗・薄井 晴・中山 玲  
付 凱林・王 倚竹・綾田泰之・杉谷大樹・松井圭介

キーワード：宗教ツーリズム，巡礼，遍路，巡拝団体，軽い宗教

### I はじめに

現代社会においては、宗教やスピリチュアリティと個人との結びつきが再び深化する可能性が指摘されている（滝沢 2019, 佐藤 2016）。宗教の「個人化」, 「私事化」が進展していく中で、宗教施設への参詣・巡礼やより大衆的な宗教ツーリズムの目的意識・経験もまた多様化している。個別の巡礼者・観光客がどのように現地での経験を意味づけてきたのかについて、ローカルな社会・経済的背景の中で理解していくことが求められる<sup>1)</sup>。

巡礼に関する研究は、地理学では1950年代以降取り組まれるようになった（Scriven 2014）。浅川（2009）によると、巡礼研究における研究課題として目的地となる巡礼地の「聖地創造論・再生論」、巡礼者の宗教経験に関わる「体験論」、巡礼地の維持・発展に係る「資源論」の3つの類型が存在している。以上の研究課題の中で、特に地理学では巡礼や宗教ツーリズムにおける受け入れ地域側の社会・経済的側面の変化や、行政・民間団体の関連・関与について議論されてきた（松井 2017）。それらに加えて、地理学における巡礼や宗教ツーリズムに対する研究視点は、巡礼地の形成という問題から訪問者の巡礼・観光行動という経験そのものが持つ意味へと分析対象が拡大しており、宗

教ツーリズムを通じた内面的な変化と社会・物理的環境との関係といった点について議論が行われている（Collins-Kreiner 2010）。これらの側面への着目は、先述した個人の内面性の理解において宗教・スピリチュアリティの重要性が再認識されてきただけでなく、移動に関わる表象・実践を分析するモビリティの視点が巡礼研究でも参照され、人間と場所との相互作用に関する分析が行われたことにより進展したとされる（Scriven 2014）。

また、現代の巡礼では祈祷・修養という伝統的な意味だけでなく、非制度的なスピリチュアリティや非宗教的な自己研鑽・自己啓発など、新しい価値体系が備わっているとされ（Nilsson and Tesfahuney 2019）。同様の指摘は日本国内でもなされている（有元 2011）。近年では、スピリチュアリティに惹かれる一方で制度宗教には関心を持たないSBNR（Spiritual But Not Religious）層の拡大も影響しており、宗教ツーリズムをより多様な意味を持つ現象へと転換させている（Ammerman 2013, 卯田 2018）。現代における巡礼や宗教ツーリズムの位置づけを分析する際には、SBNR層のような複合的な来訪動機を持つ訪問者の増加や、彼ら/彼女らの目的意識を把握することが求められる。

江戸時代以前から日本国内で実践されてきた宗教ツーリズムとして、社寺を巡回参拝する「遍路

行」の存在が指摘できる。遍路行では心身のリズムを調整し自他の変容を促進する「修練」の意味が強調されてきたが（鎌田 1999）、遍路行に関わる研究についても今後は個別の複合的な巡礼行動と目的意識に関する分析が求められる。遍路行に参加する際の要因に関する議論は、地方圏の宗教ツーリズムと地域社会の関係に対し新たな理解を与える可能性も有しているといえよう。

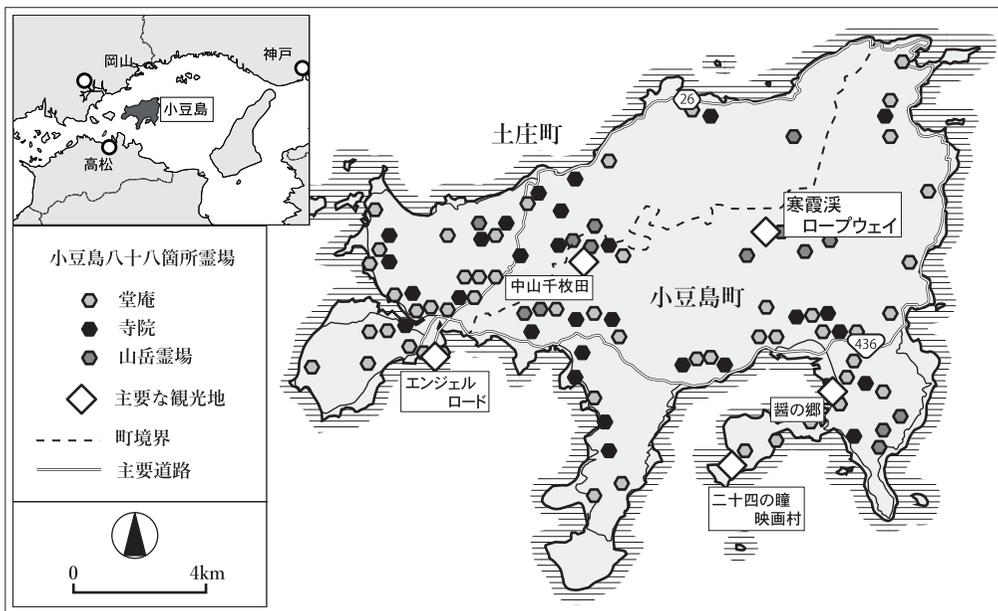
しかしながら、遍路行の特徴を検討する上で、これらが長らく講組織・信仰集団を単位とした団体参詣（団参）に支えられてきた点（小林 2019）を見過ごすことはできない。ローカルな篤信者や宗教者を指導者とし、一般民衆が組織化された集団＝巡拝団体を結成することによって、遠隔地からの遍路行が可能となってきた。また、巡拝団体によって遍路行に関わる一連の手続きが制度化されたことは、結果的に受け入れ地域の経済・社会的な持続性にも貢献してきたと考えられる。

一方で、現在では巡拝団体を主体とした参拝は衰退傾向にある。この主な要因として、高齢化や農村地域の過疎化に伴う講員の減少や、リーダーとなる篤信者・宗教者の不在といった点が指摘さ

れている（松井 1995）。以上の状況を考える上で、それぞれの巡拝団体が遍路行の中でどのような位置付けにあったのか、また受け入れ先地域の観光業にどのような影響を与えたのかについて具体的なデータをもとに経年的な分析を行った研究は少ない。巡礼や宗教ツーリズムが個人化していく過程を捉えるためには、団参の動向を質的・量的に把握した上で近年の遍路行の特徴を検証することが重要である。

そこで、本稿では地方部における巡礼地を事例地域として、団参から巡礼の個人化への変化をめぐる過程を分析し、また、受け入れ地域と訪問者の現状を踏まえ、巡拝団体単位での巡礼からその個人化への転換過程について議論することを目的とする。特に、本稿では1990年代以降の小豆島八十八ヶ所霊場における遍路行の変化を分析し、団参の退潮と遍路に対する新たな意味づけが並行して展開してきた現象である点を示し、その関連性を分析する。

本研究で対象とする小豆島八十八ヶ所霊場（以下、小豆島霊場）は814年に開基されたとされる（第1図）。17世紀頃から札所寺院の整備が進み、



第1図 研究対象地域

現在では代表的な写し霊場として知多（愛知県）、篠栗（福岡県）と共に「三大新四国霊場」とみなされている。これらの写し霊場では、本来の四国遍路と比較して自動車を用いて数日で巡礼を行うことができるため、「手軽に巡拝を楽しむ」という現代的な需要を取り込むことができる（柴谷2016）。小豆島では、毎年1月に「島開き法要」が行われ巡礼者の受入れが始まる。霊場には公式な巡拝順路は設定されていない一方で、霊場を構成する札所は島全体に配置されており、また、急峻な山岳地内の札所間を移動する点に特徴がある。また、小豆島霊場はかつて関西・中国地方を中心に活動した複数の講組織の団参によって支えられていた。現在ではその規模は縮小しており、小規模な団参や個人・世帯による遍路が中心となっている。そのため、巡拝団体単位の巡礼から個人化までの過程を捉える際に適した事例である。

## II 小豆島における宗教ツーリズムの成立と動態

### II-1 小豆島遍路の成立

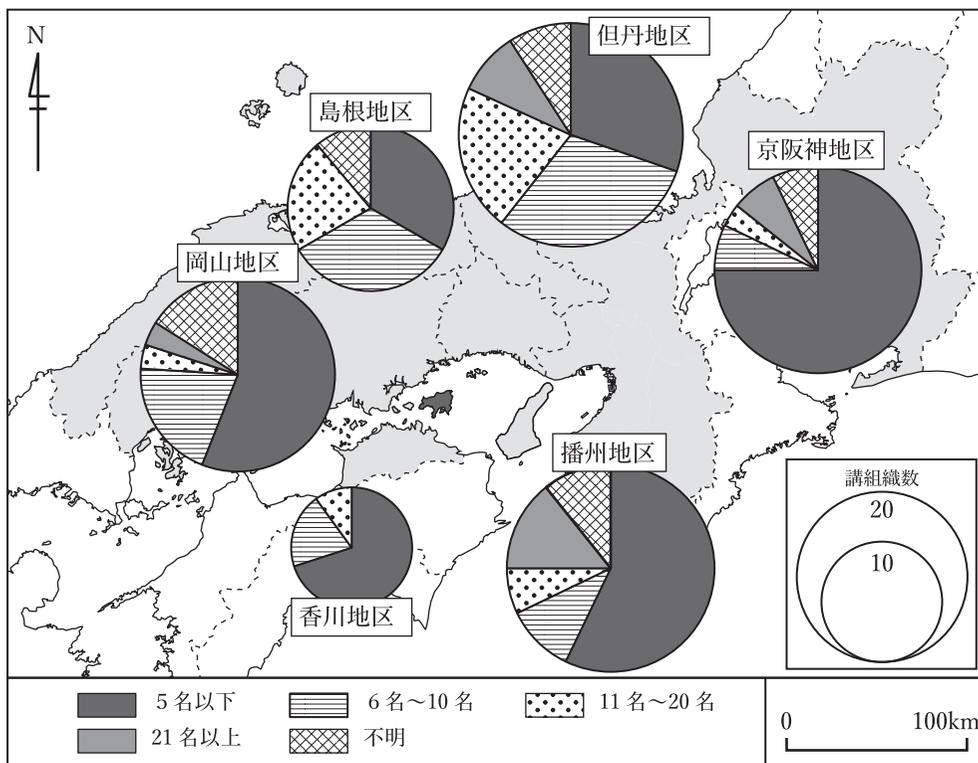
小豆島霊場の管理や遍路に関する企画や訪問者の受け入れを行う組織である小豆島霊場会が1995年に著した資料<sup>2)</sup>によると、小豆島霊場の成立は真言宗の開祖である弘法大師空海が讃岐から京都へ訪問する際に小豆島に立寄り、島内各所で祈念を行ったことが発端とされている。その後、江戸時代までに島内の僧侶・民衆により寺院・堂庵が整備され、徐々にまとまりを持つ霊場として捉えられるようになった。17世紀後半には小豆島霊場が広く周辺地域に知られ、崇敬を受ける存在となっていく。

その後、18世紀中盤の神仏分離・廃仏毀釈に伴い札所寺院の廃止・変更が行われた。小豆島霊場への巡礼者が大きく減少したため、現地では抜本的な聖地管理・巡礼形態の改革が求められるようになった。これらの要請により、1913年に島内の僧侶・観光業者により小豆島霊場会（以下、霊場会）が創設され、各種事業の催行や霊場の広報・宣伝、巡拝団体の結成、団参の促進、巡拝の達成をサポート

トする納経などの制度の構築が進んだ。霊場会は小豆島霊場の積極的な広報・布教活動に努め、「小豆島霊場名所案内記」などのガイドブックの発行や「弘法大師一千百年御縁忌法要」などのイベントを実施した。これらの活動により1930年代には再び巡礼者が増加することとなった。小豆島での遍路行の再興のため戦後以降も霊場会は継続して活動を行っており、1967年には島内に霊場会総本院が建設され巡礼者への授戒が行われるようになった。また、広報・布教活動も継続され、機関紙「遍照」<sup>3)</sup>の発行や大師伝道スクール（1972年開始）、青少年先達会（1980年開始）などの青少年層に向けた活動、徒歩での巡拝を行う「大師をしのぶ遍路行」（1984年開始）などが企画・運営されてきた。

霊場会の発足以降、中国・関西地方を中心に「大師講」、「金剛会」などといった名称の講組織が設立され、小豆島霊場への団参が行われるようになった（小田1984）。現在まで、小豆島霊場会はこれらの巡拝団体に対し所在する各地域で先達教師講習会や反省会（教線拡張会議）、地区委員会を組織し団体・講員を管理してきた。また、1930年代には先達制度が設けられ、巡拝団体の指導を行う人物を霊場会が認定・登録する制度が創設された。先達制度は巡拝団体の統制のための制度であったが、同時に権少先達から特任大先達までの称号を与え、篤信者を育成していくシステムでもあった。先達はそれぞれ巡拝団体の精神的指導者として講員の悩みや問題を遍路行につなげることで、団参という制度を維持させていた。実際に巡拝を行う際には、案内人として参拝時の指南役を務めるなどの役割も有している。

現在、小豆島霊場会に加盟する巡拝団体は所在地ごとに6地区に区分されている（第2図）。それぞれ、岡山県・広島県に該当する「岡山地区」、島根県・鳥取県に該当する「島根地区」、香川県に該当する「香川地区」、兵庫県播州地域に該当する「播州地区」、兵庫県但馬地域・丹波地域に該当する「但丹地区」、京都府・大阪府および兵庫県神戸市以東を含む「京阪神地区」である。最



第2図 霊場会に加盟する巡拝団体の構成 (2021年)

(小豆島霊場会提供資料により作成)

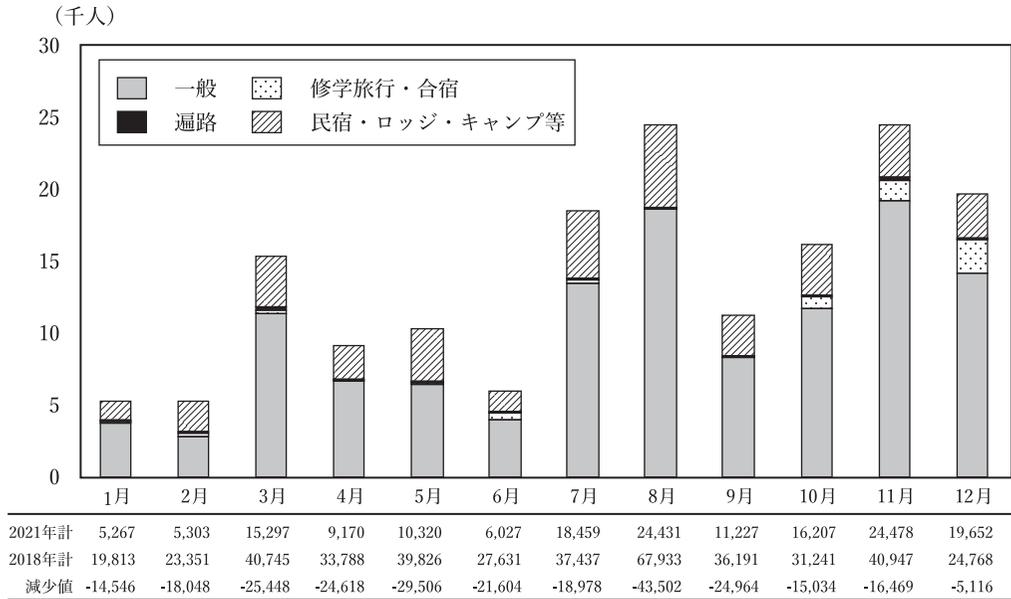
も講組織数・講員数が多い地区は但丹地区であり、現在は33団体、293名が所属している。播州地区(28団体、185名)、阪神地区(28団体、140名)、岡山地区(25団体、107名)と続いており、関西・中国地方を中心として巡拝団体の活動が行われていることがわかる。小豆島霊場における遍路の拡大には、これら巡拝団体の組織化や拡大が強く影響していた(徳島文理大学文学部コミュニケーション学科 1998)。

## II-2 小豆島内における宿泊業の動向

小豆島は霊場以外にも豊富な観光資源を有しており、多くの年代・性別の観光客が訪れる。例えば、沿岸部には海水浴・マリンスポーツを行う際に利用できる海水浴場が5ヶ所所在しており、また「二十四の瞳映画村」、「醬の郷」などの観光施設が立地している。島内中央部には国指定名勝で

ある寒霞渓や伝統芸能である「農村歌舞伎」が行われる集落が位置している。2010年以降、夏季・秋季には3年に一度行われる瀬戸内芸術祭の会場ともなるため、この時期には全国からも多くの観光客が訪問する。

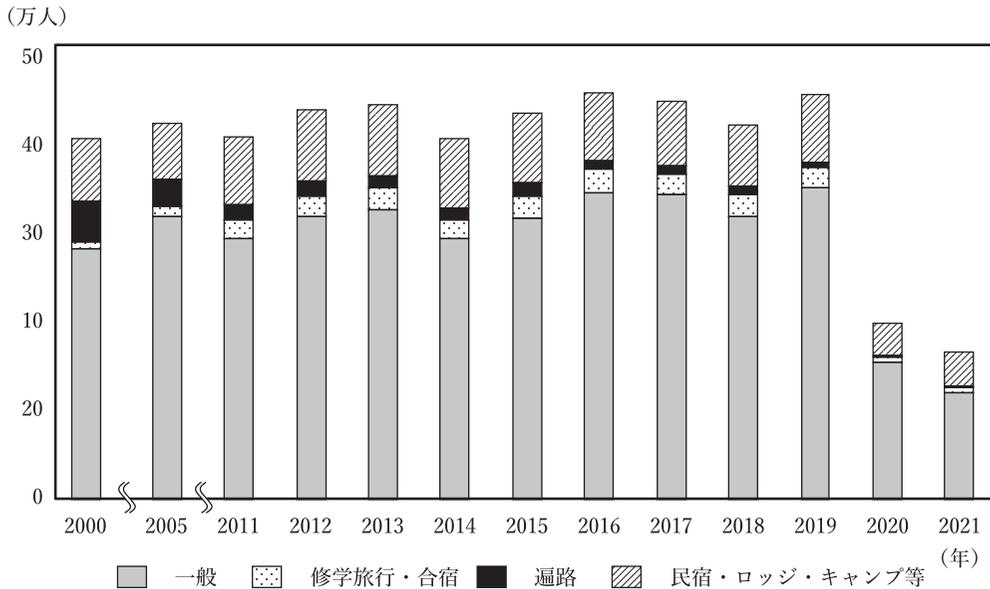
小豆島での月別の宿泊施設利用者数(第3図、第4図)をみると、各月では一般的な観光客が8割以上を占めている。中でも、7月・8月の夏季、10月~12月の秋冬季、3月の春季にそれぞれピークがみられる。これらの要因として、2月から3月までの初春季は遍路客が、また夏季は海浜レジャーや学生合宿、秋季は寒霞渓の紅葉などを目的とした観光客が集中する期間となっているためであると考えられる。しかしながら、新型コロナウイルス拡大以前の2018年における観光客数と現在の状況とを比較すると、各月で観光客数の減少がみられ、特に8月の観光客数の減少が著しい。



第3図 小豆島における月別の宿泊者数（2018年および2021年）

注) 棒グラフは2021年における宿泊者数の内訳を示している。

(小豆島観光協会提供資料により作成)



第4図 小豆島における宿泊客数の推移（2000年から2021年）

注) 2001年から2004年はデータなし。

(小豆島観光協会提供資料により作成)

観光者は多くが大阪府・兵庫県など西日本に所在する都市を出発地としており、都市における移動規制が小豆島の観光にも大きく影響している点を読み取れる。

霊場会への聞き取り調査によると、戦後初期までは宿泊費の代用となる米を担ぎ徒歩で遍路が行われ、日程も7泊8日程度であった(第5図)。そのため、島内には遍路客を受け入れる「遍路宿」が65軒存在した。利用者は遍路宿に到着すると、食事前に広間に配置してある仏壇に向かい般若心経を読んだという。しかし、1950年代以降には本州・四国と小豆島とのフェリー航路が開港し、バスや自家用車、レンタカーで直接島内に乗り入れる団体も増加したため、高度経済成長期以降は自動車での団参が一般的となった。自動車で巡礼する場合の標準的な日程は3泊4日程度であったため、宿泊施設に対する需要は徐々に低下し、1998年時点で遍路宿は33軒まで減少することとなった(徳島文理大学文学部コミュニケーション学科1998)。日帰りで訪れる一般の観光者と比較して、遍路客は長期間島内に滞在するため宿泊施設を利



第5図 昭和時代中期における徒歩での巡拝の様子

(小豆島霊場会より提供)

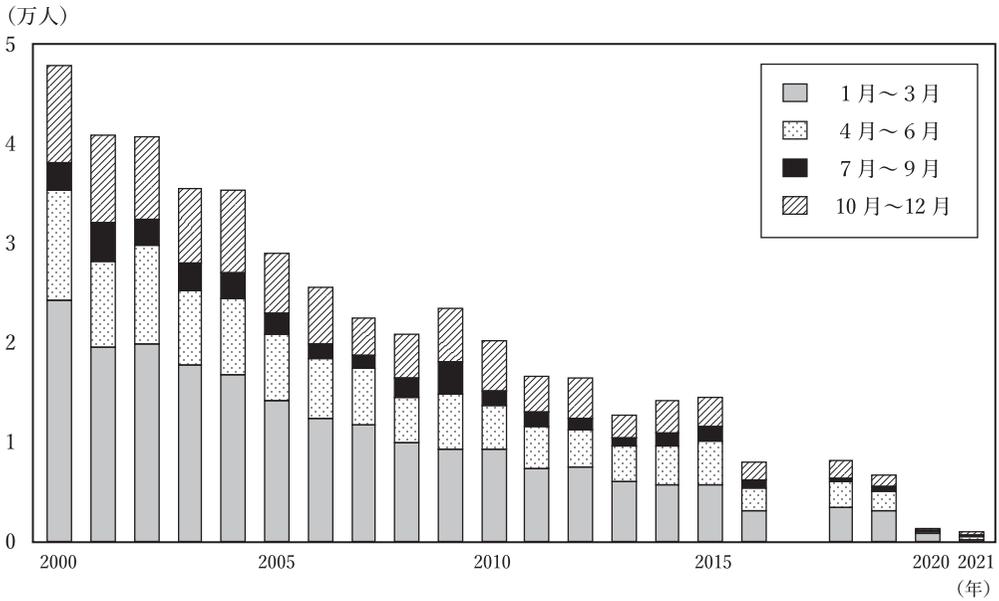
用する頻度も高いと考えられる。しかしながら、遍路に伴う宿泊者は減少傾向にあり、2000年時点で4万7899人であったが、2016年には1万人を割り込み、2019年には6740人となっている(第6図)。さらに新型コロナウイルス拡大により、個人・世帯での巡拝は維持されているが、大規模な団参は中止されていることから、2021年には1064人にまで減少している。現在では個人・世帯での巡拝は維持されているが、大規模な団参は中止されている。そのため、先達が講員のために経を持参し代参を行うこともある。

### Ⅲ 1990年代以降における小豆島遍路をめぐる変化：巡拝団体の動向を中心に

#### Ⅲ-1 団体参拝の動向

戦後の小豆島霊場における遍路客は1975年から1984年にピークを迎えており、1983年に最も多くの遍路客が訪れている(15万7469人)。その後、1995年の阪神淡路大震災などに伴い、これまで定期的に霊場に訪問していた遍路客も渡航を自粛するようになり、1990年代から巡礼者の減少がみられるようになった(徳島文理大学文学部コミュニケーション学科1998)。霊場会および島内の宿泊施設経営者への聞き取り調査においても、小豆島霊場への訪問者は1990年代前半までにピークを迎え、以降は減少傾向にあるという。これらの傾向は、巡拝団体の活動状況とどのように関連しているのだろうか。

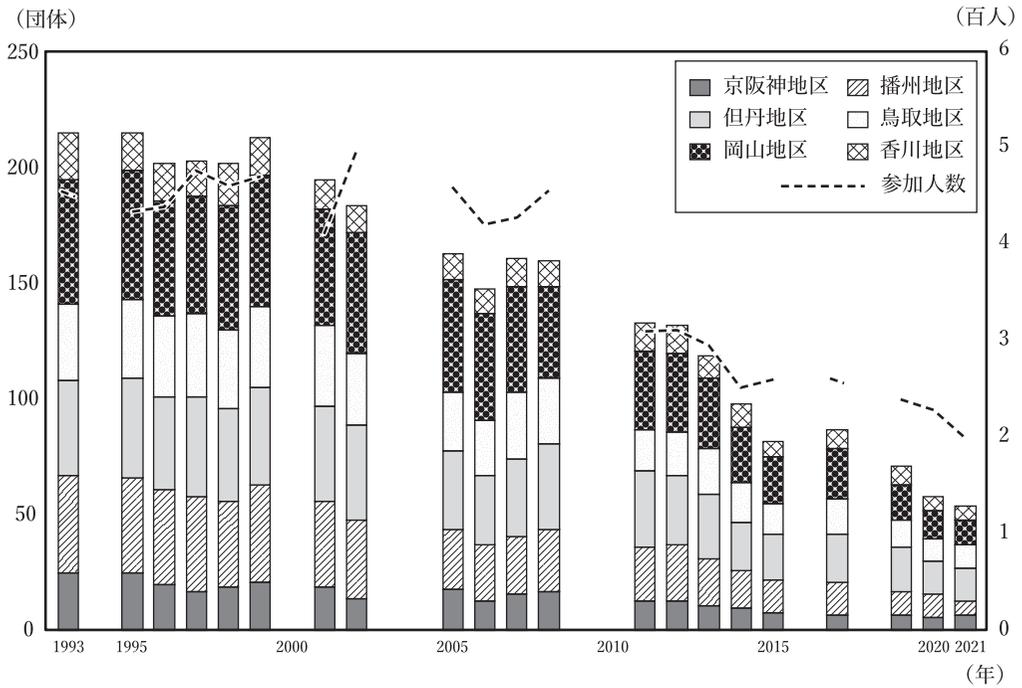
小豆島内では、観光業者や寺院、霊場会役員や各地区の巡拝団体の先達が集会し、小豆島霊場会の定例総会が実施されている。定例総会への巡拝団体の参加状況を分析することで、地域や団体ごとの活動の動向についても理解できる。1993年以降の定例総会への参加状況を示した第7図をみると、いずれも1990年代後半から2000年代以降参加団体が減少し始めた点を読み取れる。1993年時点で最も多くの巡拝団体の参加がみられた地域は岡山地区の54団体・90名であったが、2021年の総会では11団体・26名まで減少している。他にも、播



第6図 遍路客の宿泊者数推移（2000年から2021年）

注) 2017年はデータなし。

(小豆島観光協会提供資料により作成)



第7図 先達会議に参加した巡拝団体数の推移（1993年から2021年）

注) 1994年，2000年，2003年，2004年，2009年，2010年，2016年，2018年はデータなし。

(小豆島霊場会により提供)

州地区では42団体・85名（1993年時点）から6団体・19名（2021年時点）に、但丹地区は41団体・85名（1993年時点）から14団体・77名（2021年時点）に減少している。小豆島霊場の遍路そのものの動向と巡拝団体の活動状況は一致した傾向を示しており、巡拝団体に所属する先達・講員の高齢化に伴い、活動を維持していくことが困難になり団参が衰退したため、遍路客全体の減少という結果に帰結したと考えられる。

また、先掲した図2ではそれぞれの巡拝団体の講員数についても示している。各地区における巡拝団体の活動規模をみると、多くの講組織は現在10名以下で活動を行なっている。中でも、但丹・島根地区を除く各地区の巡拝団体は半数以上が5名以下で活動を行なっており、団体の規模の縮小が進展している点がうかがえる。しかしながら、但丹・播州・岡山各地区では20名を超える講組織が現在も維持されているなど、比較的巡拝団体の活動は維持されているとも捉えられる。それぞれの総講員数は但丹地区で293名、播州地区で185名、岡山地区で107名となっており、一定の講員数を保った巡拝団体が維持されている。霊場会への聞き取り調査および提供資料によると、2000年代には他の写し霊場と共同でイベントを企画するなど積極的な広報活動にも着手したが、2010年代以降は指導者となっていた先達の引退や新型コロナウイルスの拡大により、小豆島霊場会と巡拝団体との連携も滞っており、各地の巡拝団体の解散も進んでいる。霊場会に加盟する団体の中でも、2019年には3団体、2020年には4団体、2021年には9団体、2022年には8団体が解散している。

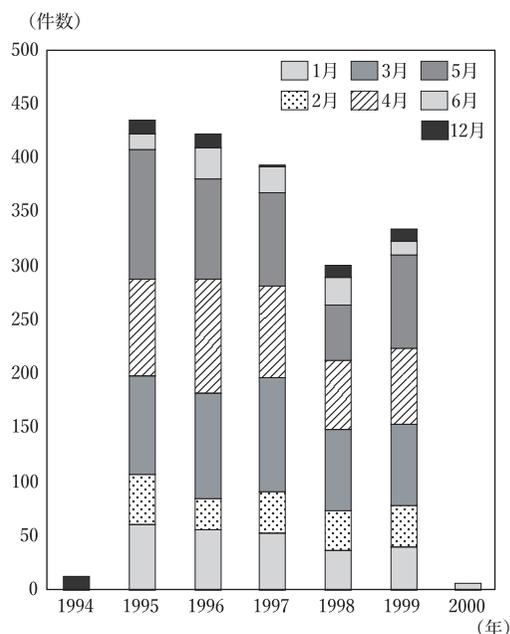
### Ⅲ-2 宿泊施設の経営状況

#### 1) 宿泊台帳からみる巡拝団体の位置付け

小豆島霊場への訪問者の減少により、受け入れ地域においてもさまざまな影響が生じたと考えられる。中でも、訪問者の増減に直接的な影響を受けると考えられる宿泊施設について、1990年代から現在までの状況を分析する。分析にあたって、戦後、遍路宿として開業し現在まで経営を行って

きた匿名旅館（X旅館）から提供された宿泊者台帳を集計し検討を行った。宿泊者台帳は1994年12月から2000年1月までの間、それぞれ12月31日から6月までの期間の宿泊者の宿泊年月日、個人・団体名、人数、宿泊数が記録されている。対象となる時期が限定的ではあるが、宿泊施設における巡拝団体の利用がどのような位置付けにあったのか、またそれがどのように変化してきたのかを検証する際に有効な資料であると考えられる。

X旅館における宿泊件数は、それぞれ435件（1995年）、422件（1996年）、393件（1997年）、301件（1998年）、334件（1999年）であり、ひと月あたり50組から60組程度の利用がみられた。また、各年において宿泊者数が多い時期は3月から5月までの春季となっている（第8図）。宿泊者の類型をみると（第1表）、最も件数が多いのは個人・世帯単位での旅行（1,114件）であり、それに巡拝団体（482件）、グループ旅行（123件）、寺院（64件）の利用が続く。巡拝団体は他の類型と比較して利用時の宿泊者数が多く、2月・3月



第8図 X旅館における宿泊者帳簿の記入時期（1994年から2000年）

（X旅館提供資料により作成）

には90名程度が一度に宿泊する場合もみられた。Ⅱでは、一般の観光者が現在の総宿泊者数の8割以上を占めており、遍路客がどのような位置付けであったのかは不明確であった。しかしながら、個別の宿泊施設によっては少なくとも2000年まで巡拝団体の利用が相当の割合を占めていた点があ

かがえる。

また、巡拝団体の内訳をみると、最も利用回数が多い団体は現在の兵庫県朝来市に本部をおいていた日本誠心会（37回）であり、次点には現在の鳥取県東伯町に本部をおく東伯一心会（28回）が続く。両団体も霊場会には非加盟であったものの、盛んに小豆島霊場への遍路を行っていた団体である（小林 2019）。巡拝団体の団参が小豆島霊場での遍路そのものを支えるという構図が、宿泊施設をはじめとした受け入れ地域の観光業にも浸透していた点が指摘できる。主要な巡拝団体の利用時期を示した第9図をみると、それぞれの巡拝団体の傾向には差異がみられる。東伯好栄会や日本仏心会などの団体は毎年特定の月間に利用が集中しているが、日本誠心会や東伯一心会、金屋大師講などの団体は複数月に分宿している。また、個人・世帯利用の少ない1月、2月には団参での宿泊者数が多くなっており、観光者の利用が少ない冬季に遍路客が宿泊施設を利用することによって、大人数の巡拝団体の受け入れが可能となっ

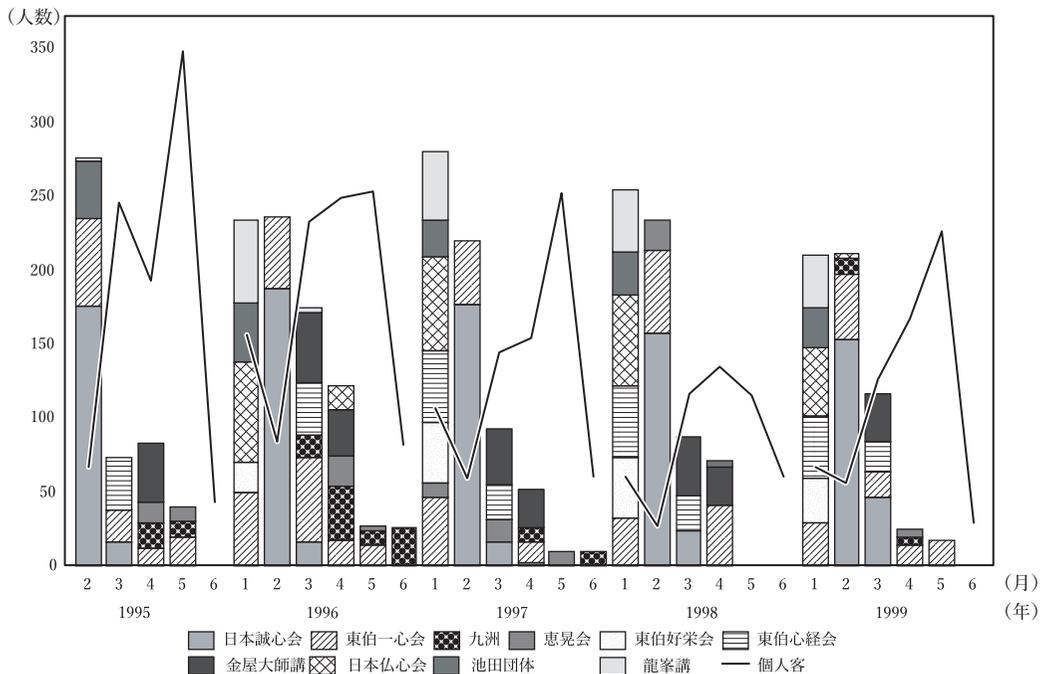
第1表 巡拝団体の宿泊施設の利用状況  
(1994年から2000年)

巡拝団体	霊場会 地区	利用 回数	その他類型	利用 回数
1 日本誠心会	—	37	1 個人・世帯旅行	1114
2 東伯一心会	—	28	2 グループ旅行	123
3 九洲	—	11	3 寺院	64
4 恵晃会	—	11	4 ビジネス	39
5 東伯好栄会	鳥取	9	5 ツアー	39
6 東伯心経会	鳥取	9	6 学生合宿	25
7 金屋大師講	岡山	8	7 タクシー	17
8 日本仏心会	鳥取	8		
9 池田団体	香川	7		
10 龍峯講	—	7		

注1) 巡拝団体のべ利用総数: 482

注2) —: 小豆島霊場会非加盟

(A旅館提供資料より作成)



第9図 主要巡拝団体のA旅館利用時期（1995年から1999年）

(A旅館提供資料により作成)

いたと解釈できる。

## 2) 宿泊施設の現状

以上の状況を踏まえ、遍路宿として開業した、もしくは遍路客の受け入れを行っている宿泊施設AからFの経営状況について、聞き取り調査の結果をもとにし、2000年以降の動向を整理していく(第2表)。

施設Aは1930年に開業した。現経営者の祖父がもともと住宅を旅館に転用し営業していたが、遍路客の受け入れ拡大に伴い1965年に建物を増築した。現在では、夏季・春季の学生合宿・臨海学校に伴う宿泊客が中心であり、その他旅行サイト経由などで一般の観光客が宿泊することもある。遍路客の受け入れは1970年代がピークであり、春季に大規模な団体参拝が行われていた。宿泊の際には、事前に各団体の先達が差配を行い遍路宿に分宿し、1施設あたり200人～300人程度の団体が宿泊することもあった。しかしながら、1990年代以降は遍路客の宿泊が減少しており、現在ではほとんど利用はみられない。新型コロナウイルスの流行以前は、年間100組程度の個人・世帯での遍路客の利用があった一方で、現在は年間30組程度にまで減少しており、団参に伴う利用も行われてい

ない。経営者は島内の寺院や観光業者により組織される霊場協力会の活動にも関与しており、大阪府や鳥取県で実施される広報イベントではパンフレット等を準備し配布したこともある。

施設Bは大正期に開業した。当時は遍路客向けの軽食を提供する飲食店も兼業していたが、1960年代に木造の建物を建て替え、旅館業専業となった。また、1970年代には観光バス事業を開始し、各札所への送迎サービスを行うようになった。他の旅館と同様に、遍路客の利用の最盛期は1970年代から1980年代であった。当時は遍路客を中心に受け入れる旅館として経営を行っていたが、現在では二十四の瞳映画村や寒霞渓を訪れる一般の観光者や学生合宿を主に受け入れている。経営者への聞き取りによると、2000年頃までは団参が盛んであったが、先達の高齢化や篤信的な講員が減少したことにより、減少傾向となっている。現在では60代から70代を中心とした個人・世帯での遍路客の受け入れが中心である。

施設Cは1863年に和菓子屋・食堂として開業し、1950年代に現経営者の祖父が旅館業を開始した。1980年代には現在の建物に改装を行なった。1960年代から1970年代が遍路客の受け入れの最盛期であり、各巡拝団体の先達と日程・宿泊人数につい

第2表 聞き取りを行なった宿泊施設の概要

	従業員*	部屋数**	他事業	宿泊者比率(%)			遍路客に対する対応
				一般	遍路	その他	
A	5(1)	34	—	10	0	90(学生合宿、臨海学校)	精進料理の提供(1990年代まで)
B	2(2)	17	観光バス	0	0	100(学生合宿)	バスによる送迎を実施していた。
C	7(1)	6	土産物屋	0	30	50(学生合宿) 20(ビジネス)	手土産を渡している。 ルート紹介、情報提供など
D	12(2)	34	土産物屋 バスの手配	10	60	10(ビジネス) 10(合宿) 10(芸術祭)	バスによる送迎 情報提供
E	40(-)	29	観光バス 土産物屋	—	10	80(ビジネス・観光客)	近くの寺院に送迎を行うことがある。
F	2(2)	20	送迎	—	80	20(ビジネス・学生合宿・観光客)	送迎・朝食・お弁当の提供

注1) \*パートなどの臨時従業員を含む、括弧内は家族従業員数。

注2) \*\*別館などの建物を含んだ数値。

(聞き取り調査の結果により作成)

て調整をし遍路客を受け入れていた。2000年以降は団参が減少していったが、個人の遍路客の受け入れは継続している。開業以降、遍路客が顧客の中心であったため、今後も遍路客の利用を重視していくという。

施設Dは1950年に遍路客向けの飲食店を開業し、その後旅館業を開始した。当時から遍路客の利用が多く、1973年には団参を受け入れるための改築を行った。1980年代まで団参が盛んであり、最盛期は他の旅館と同じく200人から300人規模の団体を受け入れていた。特に、2月には利用者のほぼ全てが遍路客で占められていた時期もあったという。2010年代以降も団参での利用は続いており、新型コロナウイルス流行前までは遍路客が半数以上を占めていたが、現在は遍路客の利用は減少している。

施設Eは1970年代に設立された。宿泊者に占める遍路参加者は少なく、高齢者を中心としたグループ利用が中心である。施設Fは醤油製造業を行っていたが、遍路客の増加に伴い飲食業、宿泊業に転換し開業した。遍路客向けには、バスでの札所への送迎や早朝に出発する遍路客向けの軽食・弁当の提供をおこなっている。1990年代以降は団参を行う巡拝団体が減少したため宿泊者数も減少傾向にある。

聞き取り調査の結果を整理すると、いずれの宿泊施設でも、1960年代以降遍路客の宿泊利用の増大に伴って施設の増改築を行ってきた。また、冬季・春季は遍路客、夏季は一般の観光客と臨海学校・学生合宿、秋季は寒霞溪への観光客など季節ごとに異なる種類の観光客を受け入れており、遍路客の利用は農閑期である2月から5月に集中していた。団参を行う場合、事前に霊場会に連絡し先達と霊場会、宿泊施設が協議を行い具体的な宿泊日程や人数を調整する。参加者が多く1ヶ所の宿泊施設のみで収容できない場合は、複数の宿泊施設に分宿する場合もみられた。しかしながら、1990年代までに遍路客の受け入れはピークを迎えており、以降は宿泊施設の老朽化・宿泊者の減少といった課題に直面している。2000年以降は巡拝

団体による利用は減少し現在は個人客の利用が拡大している。宿泊施設の中には、より一般的な観光客に対応したサービスを行う宿泊施設(施設E)や、学生合宿に対応したサービスを提供する宿泊施設(施設A、施設B)もみられるなど、経営方針を転換させ施設の維持を図っている場合もみられる。

#### IV 小豆島遍路の現状と新たな動向

他の事例(松井 1995, 栗田 2007)をみても、遠隔地に点在する信者をまとめ宗教共同体を維持していく際に、巡拝団体への所属と定期的な団参が役割を有している点は明らかである。しかしながら、巡拝団体の動向が受け入れ地域にどのような影響を与えたのかについては、既存の研究成果を踏まえより一層の議論が求められる。本稿で事例とした小豆島霊場は、大正期における小豆島霊場会の発足を契機として広報・布教が行われ、その過程で複数の巡拝団体が設立された。現在も、岡山県・兵庫県を中心に講員数が20名を超える巡拝団体が存続している。巡拝団体を基盤とした団参は1990年代まで中心的であり、多くの信者の訪問とそれらに対する受け入れ地域の関与により霊場が維持されてきた。しかし、2000年以降にそのような状況は大きく転換し、巡拝団体と先達制度により支えられてきた大規模な団参は衰退し、受け入れ地域の観光業にも影響を与えた。さらに、2000年代まで巡拝団体の受け入れをおこなってきた宿泊施設では新型コロナウイルスの拡大により利用者数は激減した。

以上の動向を組織化・制度化された民衆信仰の衰退として捉える際に、山中(2016; 2017)の指摘が重要である。山中(2016; 2017)では、制度宗教の衰退の背景として存在するのは宗教そのものの質的变化であり、現代社会では非制度的・流動的な「軽い宗教」がその影響を拡大させていく点を指摘している。また、山中(2017)は、宗教活動が消費主義の中で変容し、宗教ツーリズムには探究の実践や「セラピー的自己」の構築という

新たな役割が与えられる点を指摘した。

以上の指摘を踏まえると、巡拝団体の活動の衰退はローカルな宗教ツーリズムの退潮に直結せず、並行して遍路行に対する新たな意味づけ・目的意識が備わるようになると考えることが妥当である。霊場会や宿泊施設での聞き取り調査によると、2000年以降、個人での巡拝の割合は相対的に拡大しており、供養や祈祷・懺悔といった従来の目的だけでなく、家庭や仕事、人間関係に関わる困難や悩みなどの日常生活と結びついた動機から遍路に参加する訪問者が増加しているという。また、小豆島霊場は主に仏教寺院により構成されているが、現在では、自然環境やスピリチュアルな意味を求める訪問者も存在しているという。旅行会社主催の遍路ツアーでは島内の他の観光地も目的地として設定する<sup>4)</sup>など、訪問者は巡礼と一般的な観光が混淆した経験を求めていると考えられる。

こうした状況を踏まえ、本章では、2010年以降、遍路業の参加者がどのような動機で小豆島霊場に訪れたのかについて、アンケート調査とWeblogの分析<sup>5)</sup>を通じ概要を把握する。アンケートでは、小豆島遍路に参加した訪問者を対象として遍路への参加動機や経験についての質問項目を設定した。また、Weblogは主に小豆島霊場での遍路行経験者が発信した記事を収集し、同様の事項について分析を行った。アンケートの回答者は16グループで計35名、Weblogでの分析対象者は41名である。

アンケート回答者のうち、3グループは巡拝団体所属であったが、それ以外は個人・世帯、もしくは観光ツアーによる訪問であった(第3表)。また、アンケートおよびWeblogでの分析対象者の多く(61.1%)が、自動車を用いた際の標準的な日程である「2日から4日」で訪れている(第4表)。複数回に旅程を分け遍路を行った訪問者も17名存在している。特に、Weblogの分析対象者の中には7日以上と比較的長期間の遍路行に参加した者も存在しており、いずれも徒歩で礼所を巡っている。訪問者の出発地は東京都や兵庫県、

第3表 アンケート回答者の内訳

No.	日程	類型	ID.	性別	職業	年齢	居住地 (都道府県)	訪問歴
1	3泊4日	友人・知人	1	男	無職	70代	愛知	10回以上
			2	男	自営業	70代	愛知	初めて
			3	男	不動産業	70代	愛知	7回
			4	男	自営業	70代	愛知	10回以上
			5	男	無職	70代	熊本	初めて
2	8泊9日	友人・知人	6	男	無職	60代	熊本	初めて
			7	女	—	70代	大阪	3回
3	3泊4日	友人・知人	8	女	会社員	40代	—	初めて
4	1泊2日	友人・知人	9	女	無職	70代	島根	6回
5	—	友人・知人	10	男	無職	80代	愛知	初めて
6	2泊3日	ツアー	11	女	—	80代	愛知	初めて
			12	女	無職	80代	愛知	初めて
			13	女	無職	80代	愛知	3回
			14	女	無職	60代	愛知	初めて
			15	女	無職	70代	—	3回
7	1泊2日	ツアー	16	女	無職	70代	岡山	5回
			17	女	主婦	60代	岡山	4回
8	—	ツアー	18	男	無職	80代	島根	5回
9	1泊2日	巡拝団体	19	男	僧侶	60代	島根	3回
			20	男	無職	70代	島根	3回
			21	女	自営業	60代	島根	初めて
			22	女	無職	70代	島根	初めて
			23	女	—	80代	島根	3回
10	1泊2日	巡拝団体	24	女	—	80代	島根	3回
			25	男	事業主	60代	京都	2回
			26	女	販売	50代	兵庫	10回以上
11	2泊3日	家族	27	男	サービス業	—	大阪	初めて
			28	男	接客業	30代	大阪	初めて
			29	女	無職	70代	兵庫	10回以上
			30	男	事務職	50代	兵庫	10回以上
12	2泊3日	家族	31	女	自営業	50代	京都	2回
13	8泊9日	家族	32	女	会社員	50代	東京	初めて
14	7泊8日	単独	33	男	無職	70代	兵庫	6回
15	3泊4日	単独	34	女	医療関係	50代	大阪	10回以上
16	—	—	35	女	自営業	60代	京都	—

(アンケート調査の結果により作成)

第4表 遍路行の訪問日程

	Weblog	アンケート
日帰り	1	—
2日～4日	11	22
5日～6日	2	1
7日～	13	4
初回	18	13
2回	12	2
3回	2	7
4回	1	1
5回～9回	1	5
10回以上	—	6

(アンケート調査、およびWeblog分析の結果により作成)

大阪府、愛知県などの大都市を擁する都府県が中心である一方で、巡拝団体に多くの講員を抱えている島根県・岡山県からの訪問者も一定数存在していた（第5表）。訪問回数については、初めて小豆島に訪れた訪問者が31名であり、2回目（14名）、3回目（9名）が続いている。

訪問者の観光動機（第6表）として、Weblog分析とアンケート調査で最も多かった回答は信仰・慰霊・巡礼であった。Weblogでは「父の13回忌に超久しぶりに小豆島に行きました」（2018年7月訪問時の記事）、アンケートでは「先祖含亡妻の供養」（ID.5）など、主に慰霊としての意味が強調されていた。また、他の巡礼地での経験から参加したという回答も多く、Weblogでは「四

国遍路は6回行きましたので、今回は同じ遍路でも小豆島八十八ヶ所遍路巡礼に決定しました」（2014年5月訪問時の記事）などの記述がみられた。Weblogの分析に基づくと、訪問者がこれまで訪問した主要な巡礼先として、四国八十八箇所（18名）や西国三十三箇所（7名）、サンティアゴ・コンポステラ（3名）があった。

それらに加えて、訪問者の多くは「（中略）かねてより有名な霊場巡りをしたいという思いを持っていました」（2012年2月訪問時のWeblog記事）、「小豆島お遍路をしようと思ったのは、（中略）地域情報番組がきっかけ」（2011年8月訪問時のWeblog記事）、「一度体験したかった小豆島八十八箇所巡りのツアーがあったので参加しました」（アンケート調査におけるID.17）など「歴史・文化の学習」や「興味・関心」という動機から遍路行に参加していた。また、「四国霊場よりは随分コンパクトだけれど海あり山ありで面白そうな気がした」（2014年12月訪問時のWeblog記事）、「ハイキング気分+自分探してみたいな軽い気持ちでお遍路に挑戦することにしました」（2013年11月訪問時のWeblog記事）など、自然環境に触れるため、歩くツーリズムやサイクルツーリズムの一環として遍路行に参加する訪問者も存在している。

また、アンケート回答者の中には参加動機として「スピリチュアルな関心」、「癒やし、日常空間からの離別」といった、先述した「軽い宗教」の特徴と合致する動機も確認できた。具体的な記述

第5表 訪問者の出発地

	Weblog	アンケート
東京都	4	1
岡山県	3	2
兵庫県	3	4
香川県	2	—
京都府	1	3
広島県	1	—
大阪府	1	4
大分県	1	—
愛知県	—	9
島根県	—	8
熊本県	—	2

（アンケート調査、および Weblog 分析の結果により作成）

第6表 訪問者の参加動機

	Weblog	アンケート	
		強く影響した	影響した
信仰・慰霊・巡礼	4	16	11
これまでの巡礼経験	4	5	10
歴史・文化の学習、興味	7	6	10
歩くツーリズム、サイクルツーリズム	2	3	7
スピリチュアルな関心	3	6	5
癒やし、日常空間からの離別	1	3	6
親・友人からの誘い	2	—	—

（アンケート調査、および Weblog 分析の結果により作成）

として、「自然を満喫できて、神秘的な場所にも行くことができ良かったです」(ID.8)、「(中略)霊場での護摩だきに参加でき祈念に気持ちが癒された」(ID.16)、「小豆島は一度は行ってみたいと思っていたので、ゆっくり歩いて回ることができてとても心が癒されます」(ID.30)などがみられた。Weblogの分析においても、「私たちが本来の「自分」に戻してくれる場所」(2013年5月訪問時の記事)、「島の人々の人情と自然の豊かさに触れて行く、現代に生きる私たちが忘れがちなものを実感できる」(2011年12日訪問時の記事)などの記述がみられた。

以上、小豆島霊場においても個人の巡礼者の目的意識は多様化しており、これまで主要な目的であった信仰・慰霊に加え、スピリチュアルな関心や自然体験など、非宗教的なものを含め新たな意味が生じていた。

## V まとめにかえて

本稿では、宗教的意味に加えて非宗教的な自己研鑽・自己啓発やスピリチュアリティとの結びつきなど新たな価値体系が備わっている巡礼や宗教ツーリズムの転換の中で、小豆島における遍路がどのように変化してきたのかを検討し、その現状を明らかにすることを目的とした。中でも、1990年代以降の巡拝団体の規模の縮小、団参による遍路客の減少がどのように進展していったのか、現在の遍路行がどのような動機により支えられているのかについて分析した。

小豆島では、大正期における小豆島霊場の再編に伴い、巡拝団体を中心とした遍路客が参拝するようになった。また、高度経済成長に伴い、それまで徒歩で行われてきた遍路がレンタカーやバスで行われるようになり、数百人規模での団参も行われるようになった。受け入れ地域の宿泊施設の中でも、特に遍路宿として開業した施設は戦後の小豆島における遍路行の拡大の中で、その規模を拡大していった。宗教者や篤信者をリーダーとした巡拝団体の結成や、各地域で大師信仰の指導者

を育成していく先達制度は、小豆島霊場での遍路行を支える上で重要な要素であったといえる。しかしながら、これらの制度はいずれも属人的であったため宗教共同体の不安定化を招く一因ともなりうる。1990年代以降、先達・講師の高齢化や所在地域の過疎化に伴って巡拝団体の規模が縮小し、従来の団参によって地方の巡礼地が支えられるという構造に変化が生じている。現在では、小豆島における観光業全体の中で遍路が占める割合は小さくなっている。また、島内の宿泊施設の中には、遍路客が減少したことにより経営方針の転換に迫られている場合もみられた。

かつて中心的であった巡拝団体が衰退する中で、個人で遍路に参加する訪問者の動機は多様なものとなっていた。これまで主要な動機であった「信仰・慰霊・巡礼」や「他の巡礼経験」などの動機に加えて、非宗教的・スピリチュアルな動機に基づく参加や、離島でのアクティビティの一環として遍路を捉え参加した訪問者も存在した。山中(2016:2017)では、「軽い宗教」の浸透に伴う宗教ツーリズムの変化の中で、固定的・制度的な制約に拘らない脱文脈的な訪問者の存在を指摘している。今後、地方部で宗教が観光資源として活用されていく中で、地域の宗教文化の真正性は個人ツーリストの消費の対象としてより取捨選択を迫られていく(山中2016、松井2017)。実際に、2018年6月には日本遺産への登録を目指す研修会が土庄町職員や島内の僧侶らを中心に開催されるなど、小豆島八十八箇所霊場を地域の宗教文化として位置づけ活用を推進する動きがある。

その際に、今後の研究の課題として、観光資源としての宗教に対する認識が変化していく状況を理解する際の背景として、強固な組織・制度によって下支えされていた巡礼や宗教ツーリズムにおいて、巡拝団体や信徒によりそれぞれの宗教空間がどのような場所として認識されてきたのかについて検討していくことが求められる。

調査の遂行にあたって、小豆島観光協会および小豆島内の観光業者の皆様、小豆島霊場会、札所寺院の皆様には聞き取り調査へのご協力、資料の複写・閲覧にあたって多大なるご協力をいただきました。また、現地調査では筑波大学地球学類（当時）の市川竣介氏・上原雄正氏・大栗 碧氏・竜波駿平氏の協力を得た。末筆ながら御礼申し上げます。本研究には、2022年度（株）地域科学研究所奨学寄附金「ツーリズムによる地域社会の活性化に関する地理学的研究」（研究代表者：松井圭介）およびJSPS科研費21H03717（研究代表者：呉羽正昭）、同19H04379（研究代表者：松井圭介）の一部を使用した。

#### [注]

- 1) 巡礼 (Pilgrimage) は遠隔地で行われる非日常的活動であり、そこでは自己の内的理解が目的として存在すると理解されてきた。しかしながら、現代の巡礼は制度宗教に基づく信仰という側面は必ずしも重視されておらず、個人的な問題や消費行動と関連した日常生活の延長線上にある行動として理解される (Collins-Kreuner 2010, Scriven 2014, 南地 2021)。これらは1990年代に宗教ツーリズム (Religious tourism) として一般化されてきた (山中 2016)。Collins-Kreiner (2010) では、宗教的な位置づけに基づく巡礼と、宗教経験を資源として消費する宗教ツーリズムを明確に区分することが困難である点を指摘している。本稿では、小豆島霊場に訪れた巡礼者・観光者を「訪問者」として総称する。
- 2) マルシマ印刷が編集する情報誌『月刊 PEOPLE』1995年11月号別冊「小豆島霊場会特集号」内の「小豆島霊場の歴史」(pp.27-38)。
- 3) 当初、機関誌「遍照」は島内唯一の新聞であった『小豆島新聞』の特集号として発行された。現在では、霊場会の機関誌として年4回刊行されている。内容は霊場会の活動・行事の予定・報告、先達の承認や遍路参加者の霊験譚などが収録されている。
- 4) C旅館での聞き取り調査より。
- 5) Weblogは私的・公的領域の双方が含まれているメディアとして位置づけられ、オフィシャルな言説に対比される個人の多様な認識をとらえる際に有効であり、従来のエスノグラフィとは異なる分析が多様となる (Ibrahim 2006, Takeda 2013)。2008年から2022年までの小豆島霊場での巡礼・宗教ツーリズムを扱ったWeblog投稿のうち、本稿では遍路行に参加した動機や出発地、日程について記載のあった41件を研究対象として設定した。また、アンケートは9月から11月までの期間において、施設Aに遍路のため訪れた宿泊客向けに配布・回収を行った。

#### [文 献]

- 浅川泰宏 (2009) : 最近の遍路・巡礼研究の動向と特徴。第1回四国地域史研究大会公開シンポジウム・研究会プロシーディングズ, 8-19.
- 有元裕美子 (2011) : 『スピリチュアル市場の研究: データで読む急拡大マーケットの真実』東洋経済新報社.
- 卯田卓矢 (2018) : 世界遺産斎場御嶽における来訪者の特性とスピリチュアリティ。地理空間, 11, 21-46.
- 鎌田東二 (1999) : 『聖地への旅: 精神地理学事始』青弓社.
- 栗田英彦 (2007) : 四国遍路の展開における講集團の関わり。東北宗教学, 3, 37-57.
- 小林奈央子 (2019) : 鳥取からの小豆島巡拝—「東伯一心会」の活動を中心に—。山岳修験, 64, 63-76.
- 佐藤貴史 (2016) : 反省的／再帰的近代化と宗教。北海学園大学人文論集, 60, 93-120.
- 柴谷宗叔 (2016) : 四国地方における各種巡礼。印度學佛教學研究, 64, 662-666.
- 滝澤克彦 (2019) : 「リスク社会」における宗教—超越的なものの所在をめぐって。多文化社会研究, 5, 321-331.
- 徳島文理大学文学部コミュニケーション学科 (1998) : 『小豆島: 徳島文理大学文学部共同研究』徳島文理大学文学部コミュニケーション学科.
- 南地伸昭 (2021) : 巡礼ツーリズムにおける経験価値のモデル実証—西国三十三所巡礼バスツアー参加者への質問紙調査を基に—。観光研究, 33, 89-105.

- 松井圭介 (1995) : 長野市における笠間稲荷信仰の地域的展開. 地域調査報告, **17**, 109-120.
- 松井圭介 (2017) : 『観光戦略としての宗教: 長崎の教会群と場所の商品化』 筑波大学出版会.
- 山中 弘 (2016) : 宗教ツーリズムと現代宗教. 観光学評論, **4**, 149-159.
- 山中 弘 (2017) : 消費社会における現代宗教の変容. 宗教研究, **91**, 255-280.
- Ammerman, N.T. (2013) : Spiritual but not religious? Beyond binary choices in the study of religion. *Journal for the scientific study of religion*, **52**, 258-278.
- Collins-Kreiner, N. (2010) : The geography of pilgrimage and tourism: Transformations and implications for applied geography. *Applied geography*, **30**, 153-164.
- Ibrahim, Y. (2006) : Weblogs as personal narratives: Displacing history and temporality. *M/C: A Journal of Media and Culture*, **9**, <https://doi.org/10.5204/mcj.2690>.
- Nilsson, M. and Tesfahuney, M. (2019) : Pilgrimage mobilities: a de Certeauian perspective. *Geografiska Annaler: Series B, Human Geography*, **101**, 219-230.
- Scriven, R. (2014) : Geographies of pilgrimage: Meaningful movements and embodied mobilities. *Geography Compass*, **8**, 249-261.
- Takeda, A. 2013. Weblog narratives of Japanese migrant women in Australia: Consequences of international mobility and migration. *International Journal of Intercultural Relations*, **37**, 415-421.

## 英文タイトル

### Changes of Religious Tourism on Shodo-shima Island and the Characteristics of Pilgrims' Experiences

KAWAZOE Wataru, LIU Yifei, SAKAMOTO Yuki, SUZUKI Shuto, USUI Haru, NAKAYAMA Akira,  
FU Kailin, WANG Yizhu, AYADA Yasuyuki, SUGITANI Hiroki and MATSUI Keisuke